



Title	後続の出来事を表すas節
Author(s)	田岡, 育恵
Citation	Osaka Literary Review. 2000, 39, p. 35-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25226
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

後続の出来事を表す as 節

田 岡 育 恵

O. はじめに

衣笠（1996）は時を表す as を「増減」、「連続」、「状況」、「知覚」、「振動」、「付帯状況」、「出来事」、「原因」、「接触」、「場面」と多岐に分類している。しかし、実際はこのようにすっきりと分類出来ない場合も多いと思われる。また分類を多くすることは英語学習者にとって望ましいことではないと思われる。筆者はこのように as の意味を分類していくのではなく、時を表す as の意味は 1 つで主節の付帯状況表示と考える。

as 節は前置される場合と後置される場合があるが、ここでは後置されている as 節で、主節で表す出来事より後で起こる出来事を表している場合を取り上げる。このような as 節は従来、気付かれていなかったと思うが、梅咲（1999）が新聞英語に見られるものとして主節の後続の出来事を表す as 節を指摘した。また、衣笠（1999）もシナリオのト書きに見られるものとしてこのような as について言及した。本稿で取り上げるのもこの as 節だが、これは新聞の報道記事やト書きに限られるものではなく小説においてもよく見られるものである。

このような as 節は主節よりも後の出来事を表しているという点において新情報であるが、前景化するのではなく、あくまで後続の付帯状況を表すと筆者は考える。本稿では、このような as について田岡（1995）で考察した「主従が逆転する when」とも比較し、as の特異性を見てみたいと思う。

1. as の意味とは何か

衣笠 (1996) は前置 as 節を「～するにつれて」という「増減の as」、「～すると」という「連続の as」、「～していると」という「状況の as」に分けているが、これらは全て主節の事態の状況説明をしている点で同じものと言えるのではないだろうか。また衣笠 (1996) は、後置 as 節を「～しながら」という「付帯状況の as」、「出来事の as」、「知覚の as」、「振動の as」、「原因の as」、「接触の as」、「場面の as」に分け、以下に示すような例を挙げている。

- (1) They talked as they ate. (付帯状況の as)
- (2) He was sweating and apologizing as they met at the parking lot. (出来事の as)
- (3) He watched Catherine with amusement as she tasted it. (知覚の as)
- (4) Dr. Isarael Katz felt the plane shudder as the wheels were lowered and it started its descent. (振動の as)
- (5) Catherine blushed as she thought of it. (原因の as)
- (6) Just as the boys left the tracks, the crossing gate came down. (接触の as)
- (7) The photo was taken as he entered the airport in New Orleans. (場面の as)

—以上、衣笠 (1996)

しかし、これらの例を見れば、どれも主節の事態が起こった時の状況を表した as であると言えよう。

シナリオのト書きに使用される as を考察した衣笠 (1999) では分類を「知覚の as」、「原因の as」、「場面の as」、「対比の as」、「同時性を示す as」に絞っているので、その分類について見てみよう。先ず、各例を挙げる。

(8) a. I watched her as she combed her hair.
 b. We listened in silence as the names of the dead were read out. (知覚の as)

(9) a. Michael looks up as he hears the sound of a helicopter.
 b. Mitch suddenly stops in his tracks as he notices something. (原因の as)

(10) And as he looked at her, his heart sank. (場面の as)

(11) a. The IMF team is seated around a table as Jim gives them an outline of the plan.
 b. Sonny holds his hands out as Mitch stares. (対比の as)

(12) a. He looks worried as he looks back at the group.
 b. Abby gasps as she talked on the phone. (同時性を示す as)

—以上、衣笠（1999）

先ず「知覚の as」であるが、そのような知覚をもたらしたものということで「原因の as」に入れてもよいのではないかと思われる。そして、「原因」というのは主節の状況説明に含めることができると思う。次に「場面の as」についてであるが、「場面」というのは結局、状況説明である。「対比の as」も、これも主節の事態が起こっていた時にその周囲でどのようなことが起こっていたかということで、状況説明と言えよう。衣笠（1999）は（11b）の「ソニーは手を伸ばしミッチがにらみつける」のような as 節の方が後続の事態になる場合をシナリオ独特の特徴としているが、後で紹介するようにこのような例は小説の状況描写で実に多いのである。このような as では主節と従節で役割が逆になっているように見えるが、このことについては後述する。最後に「同時性の as」、これは同一人物の表情、口調等が主節に、その時の動作が as 節に来るものとされているが、これも主節の状況説明と言えるだろう。このように衣笠（1999）が細かく分類している as 節の機能は主節の

状況説明にまとめることが出来るものと考える。

2. as の未完結性

木塚／Varderman (1997) は、(13) のようにある動作を既に終え、その後で次の動作が行われる場合は as ではなく when が用いられるとしている。同様のことは Turton (1995) においても (14) の文で述べられている。

(13) { \times As / \bigcirc When} he reached Sapporo, he called his mother.

(14) { \times As / \bigcirc When} I arrived home, I phoned the police.

更に『大修館ジーニアス英和辞典』(第2版) は (15) ではまだ完全に部屋に入っているくともよいが when にすると部屋に入る行為が完了した事になると述べている。Thomson／Martinet (1986) は (16) では最初の行為が終わる前に2つ目の行為が始まっているが、when にすると1つ目の行為は終わっている感じがすると述べている。

(15) As I entered the room, they applauded.

(16) As I left the house, I remembered the key.

また、Swan (1995) には進行している行為、状況でなければ時の as は使うことが出来ないとの言及があり、Thomson／Martinet (1986) においても時の as は通例、進行形になれない動詞と共に使われることはなく、「次第に～になる」の感じを伴う時は別と但し書きが付けられている。

これらの見解を踏まえれば、when は事態の完結を表すが as は幅のある事態を表し未完結を含意することになる。上掲の例文の as 節の動詞は reach, arrive, enter, leave でそれら自体は完結相である。それが as 節で用いられれば未完結の含みが出てくる。これは as の成せる業のように考えられる。衣笠 (1999) は 完全に動作が完結している as の例として (17) のような例を挙げているが、これらも動詞のみに注目すれば完結ということに

なるだろうが、as 節の中ということで完全に動作は終わっていないと言えるのではないだろうか。

(17) a. As Hitler opens the Grail Diary, an aide put a pencil in his right hand.
b. As the elevator doors open, people shove to get in.

現在完了が過去に完了した事態を表しているのに過去形にはない現在との関わりを含意するのと同様に、as は完結した事態を表しているとしか考えられないような場合でもその事態の余韻の内に主節の事態が起こるという意味を出すのではないかと思う。as によって主節と as 節の事態の融合が導き出されるものと考える。

3. 後続する行為、出来事を表す as 節

衣笠 (1996) では、as 節内に様態の副詞がある、as 節で詳しい描写を行っている、次の文の主語が as 節の主語と同じ等の理由で背景とは言い切れない as 節があるとしながらも主節より後の行為を表す as 節があるとは断言していない。衣笠 (1999) では、as 節が主節の行為が起こった後で起こる行為を示している (11b) のような例を挙げているが、これはシナリオ独特のこととしている。一方、梅咲 (1999) は (18) のような例を挙げ「同時情報たたみかけの as」を提案している。

(18) a. The marriage of the Prince and Princess of Wales ended with the granting of a decree absolute yesterday as the Prime Minister said there was no immediate prospect of the Prince marrying again.
b. Michael Jordan scored 32 points yesterday as Chicago Bulls equalled the National Basketball Association record with

their 69th win in a season 98-72 over Cleveland Cavaliers in Cleveland. — 以上、梅咲 (1999)

梅咲 (1999) は、このような as は通常の as とは逆で主節の事態を受けて as 節の事態に至っており、主節の事態が as 節の事態の原因になっていると指摘した。これは主節の事態に後続する事態を表す as である。しかし、広い意味では主節と as 節は同時であるので梅咲 (1999) はこのような as を「同時情報たたみかけの as」と呼んだのである。梅咲の視点は面白いが、彼女はこのような as を報道記事に特有のものとして示したのである。しかし、実際には主節の事態を受けての後続する事態を表す as 節というのは、シナリオや報道記事に限られず小説の中でも頻繁に出てくるものなのである。尚、後続の事態を表すと言っても主節の事態とほぼ同時ではある。ただ、上で as は主節の状況説明がその機能だと述べたが、この場合はそれが主節と従節で逆になっている。いわば「主従逆転の as」である。後で、田岡 (1995) で考察した「主従が逆転する when」と比較してみたいと思うが、先ずは、そのような as の例を示したいと思う。

- (19) 'Tell your father that,' Liz said coldly, and turned her back on them as she started to do the dishes. — Danielle Steel, *The Gift*
- (20) 'Take care of yourself, Maribeth,' he smiled and she smiled back at him with a wave, as she closed the door softly behind her. — *ibid.*
- (21) 'She's beautiful, Mom,' she said, with tears rolling down her cheeks, as Tommy brushed them away with gentle fingers. — *ibid.*
- (22) 'Just like you and me, huh Mom?' she asked nestling close to Liz, as her mother bent down to kiss her. — *ibid.*
- (23) He wanted to share so much with her, and he knew he would

never let her go now, he kissed her again and then left her finally as he hurried down the steps looking handsome and tousled. — *ibid.*

(24) He sat back in his chair, one hand held out to her, as she took it. — Danielle Steel, *To Love Again*

(25) And then with a kiss she was gone as he stood watching the door. — *ibid.*

(26) She tucked him in tightly and closed the door softly as she walked into the long mirrored hall. — *ibid.*

(27) Before she could answer him, he had jumped out, gone around the front of the Rolls, and holding the door open for her, as, astounded, she stepped out. — *ibid.*

(28) "How disgusting," Victoria said with unreserved disapproval, as Olivia and their father laughed at her reaction. — Danielle Steel, *Mirror Image*

(29) "You'll feel better when you go to Europe this summer," India said kindly, as Gail shrugged a shoulder in answer. — Danielle Steel, *Bittersweet*

(19) では背を向けてからお皿を洗い始めるのである。(20) では(別れの挨拶として)手を振って微笑んでから戸をしめるのである。(21) では涙がこぼれたのでそれを指でぬぐう。(22) では娘が摺りよってきたからキスをした。(23) では彼女の元を去ってから階段を降りて行った。(24) では手を差し出したのでその手を取る。(25) では彼女が去ってしまった後の戸をみつめている。(26) では戸を閉めてから廊下に出る。(27) では相手が車のドアを開けたので車から降りた。(28) ではヴィクトリアの反応に対してオリヴィアと父親が笑ったということである。(29) ではas節の中にin answer

が見られるように主節で相手が言ったことばに対する反応を as 節は示している。これらの例では主節と as 節の事態を較べれば主節の事態が as 節の事態の前提になっているということは一目瞭然である。

さて、時の副詞節の役割は主節の状況設定である。しかし、上に挙げた as ではそれが主節と逆になっている。これは as に限らず when にも言えることである。そのような when は Morgan (1975)、Green (1976) で既に取り上げられていて、巻下 (1979) もその逆転性について言及している。田岡 (1995) では (30) のような例について考察した。

(30) a. He was about to pass it when his movement was suddenly arrested. — Agatha Christie, *A Caribbean Mystery*

b. He was actually in the act of typing a letter when he was shot. — Agatha Christie, *They Do It with Mirrors*

c. She was finally about to offer her condolences when I shushed her. — P. Brackett, *I Love Trouble*

d. Brackett was about to turn right when I tugged him left.
— *ibid.*

e. She thought about that, and was putting her spiral pad and pen back into purse, when the slip of paper with "#307" on it slipped out onto the floor. — *ibid.*

f. Kim was pointing to another middle-aged man — to whom Darlene had just wandered over to flirt with — and seemed about to dish, when something else caught her attention.
— *ibid.*

では、このような as 節と when 節の共通点、相違点を考えてみよう。先ず共通点としては、既に述べたように本来、副詞節で主節の時間設定をするところが逆になっている。(30a) では主節で何かを渡そうとしていた動作が

急に止まったということを when 節で表している。(30b) はタイプを打っているという主節の行為の最中に撃たれたということを when 節で表している。(30c), (30d), (30e) では、それぞれ、お悔やみを言おうとしたから黙らせた、右に行こうとするから左に引っぱった、鞄にメモ帳やペンを直していたら紙が落ちたというように主節の行為がなかったら when 節の行為は起こり得ない。(30f) では主節で述べられているのとは別の事が彼女の注意を引いたということで、これも主節の事態が when 節の事態に先行していると言える。

これらの例は意味からすれば先行する節の方に as や when をつけるべきと思われるものである。しかし、何故そうならなかったのかということについて、田岡 (1995) で逆転 when については述べた。上に挙げた (19) から (29) の as の例を見れば、先ず、先行する節が and やコンマで接続されていたり分詞を用いたりして長く、前置された従属節の中にまとめて取り込むには無理があると思われる場合がある。また、それぞれの先行文脈との関係で先行する節は主節として導入されるのが自然で、as 節という時間設定にするのは唐突であるということも考えらる。次に、Swan (1995) は as 節には普通、あまり重要な情報は来ないと述べているが、上の例でも後続の節は主節に昇格するだけの情報価値のある内容を持っているとは言い難い。描写の中心は先行する節の方である。また、上の例のような文では as 節と主節はほぼ同時に起こっていて、言わば融合していて、はっきりと切り離すことが出来ないように思われる。このような場合は、先行する節を as 節に換えて状況設定を明示してから後続の節を示して 2 つの事態を関連づけるというものではない。この点において as 節でも前置される場合と後置される場合ではいさか事情が異なるだろう。as と when の違いとして as の場合、先行する主節の状況の中で as 節の事態になると言っても、それを敢えて状況設定と呼ぶ程のものではなく寧ろ主節に連続し主節と一体化した事態を表している。これに対して、when の方は描写の主眼は後続の when 節にある

という点が異なると言えよう。

一方、何故、このような as 節、when 節の場合、as や when など用いずに独立した次の文で事態を導入しなかったのかという疑問も出てくるが、主節と as 節が融合しているため別の文で表せば唐突になる、あるいは別の文で述べる程のこともないことを独立させておかしくなると思われる。

as と when の相違点として、as の方は上の例で示したように「手を差し出し、「その手を取る」、「ドアを開け、車を降りる」のように主節は状態ではなく完結する行為を表していて、主節と as 節で連続する行為を表している場合があるが、逆転 when の場合は主節は必ず、進行形、過去完了、be about to や be 動詞といった継続相の動詞になる。主節で述べられている事態がそのまま続いていると思われているところに when 節の意外な事態が起り、主節の出来事が中断される、あるいは中断されないまでも何らかの状況変化が意識されるのである。主要情報は主節ではなく when 節にあると言える。as の場合は、主節とほぼ一体化した事態を as 節で表しており、情報の焦点が as 節にあるということはない。when は主節とは独立した事態を導き得るが as の場合、主節と as 節の事態の融合がその特徴である。後続の事態を表しても as 節の事態が前景になることはないと思う。それは as 節が主節と言わば一体化しているからであり、また、when 節は完結した事態を表すので点として捕えられるが、as 節は未完結の含みを持つので幅のあるものとして捕えられる。前景化され得るのは点であって幅のある方ではないと考えるからである。尚、この as の未完結性から来る幅は次の文の背景の一部として機能するものと考える。

この章で見てきたような as 節を考慮に入れれば as の意味というのは、主節の事態に先行する事態の場合であれ後続する事態の場合であれ、主節の付帯状況表示ということになるものと考える。

4. when と as

上で、完結であり点として捕えられる when に対して as は未完結で幅であると述べた。ここでは as が使われている実例を挙げ、それを when に換えるとどうなるのかということを考えてみよう。下に挙げる例は後続する事態の as に限らず、(31) 以外、(32), (33), (34) は as 節の事態が主節に先行するものである。

(31) The sound of the birds outside were muffled by the heavy brocade curtains of Henderson Manor, as Olivia Henderson pushed aside a lock of long dark hair, and continued her careful inventory of her father's china. — Danielle Steel, *Mirror Image*

(32) Bertie smiled as she held up a glass of ice-cold lemonade and a plate of gingersnaps fresh out of the oven. — *ibid.*

(33) Olivia came down the ladder gracefully, and kissed the old woman's cheek as she wrapped her long, elegant arms around her. — *ibid.*

(34) Liz nodded, as she lay in the dark, thinking about both of them. — Danielle Steel, *The Gift*

主節の事態を時の一点として限定するのが when の役割だが、(31) の as を when にすると主節の鳥のさえずりが分厚いカーテンでかき消されている状況を when 節の髪を払って仕事を続けるということで限定する意味がどこにあるのかということになるだろう。(32) でも when にすれば、グラスと皿を取ったことで主節の「微笑む」が時の一点として限定され、2つの事態の因果関係が強調されてしまうだろう。(33) でも as で表されている「相手の身体に腕を回してキスをする」という一連の行為が「相手の身体に腕を回した時にキスをした」というように別個の行為として関係づけられ不

自然になる。(34)においても同様の不自然な結合関係ができてしまうだろう。

as と when の違いは主節と融合するかどうかの違いである。when の場合、(30)のように when 節の出来事のため主節の動作が急に終わってしまうということがあるが、as の場合は主節の事態に付随的な事態が付け加えられるだけであり as 節で主節の情報を上回るような重要な出来事が出てくるわけではない。これに対して、when は主節の事態を時の一点として限定する。上の例のように主節と as 節が明確な時の限定で結ばれているのではないような場合、when に換えると、そのような限定をしてしまい、不自然な関連づけが強いられることになるのである。

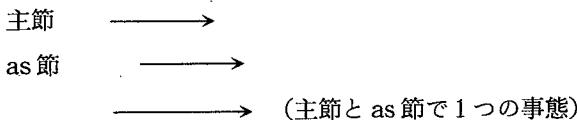
5. おわりに

時の as は多岐に分類すべきではなく主節の付帯状況表示の働きをするとすればよい。細かい分類は重なる部分も多く、また分類の名称が適切ではないということもある。言語学習という観点から多くの分類は望ましくないだろう。as は完結相の動詞が来ても節全体は未完結の解釈を受けるということから as 節というのは本来、未完結性を備えていて主節に付随する事態を表すものと言えよう。しかし、as 節は必ずしも主節に先行する事態のみを表すわけではなく、主節に後続する事態を表す as 節もあり、そのような as 節は小説においても頻繁に出てくる。このような場合、先行する節は and やコンマによる並列、分詞の使用により前置された副詞節では收まり切らない程、長くなっている例が見受けられる。先行文脈との関連で主節としての導入が適切であるということも考えられる。また、先行する節に as を付けて状況設定を聞き手にさせて後続の節を導入する程、重要な情報が後続の節に来るわけでもないということが言える。この点で as と when は異なる。when の場合、後続の事態を表す場合は情報の主眼は主節ではなく when 節にある。as の場合、主節と連続する事態を表し、主節の方が先に

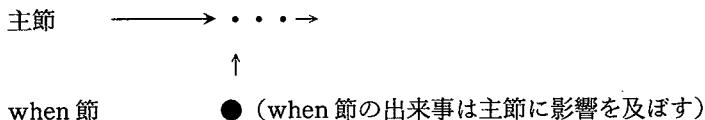
起こっていても主節と as 節で一体となって 1 つの事態を表しているのである。主節と as 節は融合している。when の場合、主節と when 節は別の事態で、それが同時成立していることになり、主節の事態を時の一点として when が限定しているのである。そのため、主節と when 節の関連づけの読みも強くなる。したがって as を when に換えると不自然な結合関係が出来てしまうのである。

本稿で見た主節より後に起こる事態を表す as と when を図示すれば次のようになると思う。

(35) a. 主節に後続する事態を表す as



b. 主節に後続する事態を表す when の場合



参考文献

Green, G. (1976) "Main Clause Phenomena in Subordinate Clauses" *Language*. 52. 2. pp. 382–397.

木塚晴夫／J. Varderman (1997) 『日本人学習者のための米語正誤チェック辞典』
マクミランランゲージハウス。

衣笠忠司 (1996) 「時を表す as 節—前置と後置の違い—」 『英語語法文法研究』 3. pp. 97–111. 英語語法文法学会

衣笠忠司 (1999) 「接続詞 as, when, while の語法 — シナリオのト書き部分を中心
に—」 JACET 辞書研究会ワーキングショップ発表論文

小西友七編 (1994) 『ジーニアス英和辞典』第2版 大修館。

卷下吉夫 (1979) 「WHEN とその逆転性について」『英語と日本語と』林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会刊行 pp. 323-343. くろしお出版。

Morgan, J. (1975) "Some Remarks on the Nature of the Sentences" in Grossman, R., J. San and T. Vance eds. *Papers from the Parasession on Functionalism*. pp. 433-449. Chicago Linguistic Society.

Swan, M. (1995) *Practical English Usage*. 2nd ed. Oxford University Press.

田岡育恵 (1995) 「主従が『逆転』する when 構文について」『園田学園女子大学論文集』30-I pp. 61-73. 園田学園女子大学

Thomson, A. J. and A. V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar*. 4th ed. Oxford University Press.

Turton, N. D. (1995) *ABC of Common Grammatical Errors*. Macmillan Languagehouse.

梅咲敦子 (1999) 「報道記事にみられる接続詞 as の用法」JACET 辞書研究会ワークショップ発表論文